

## 『カストロ家の真実』

CIAに協力した妹が語るフィデルとラウル

安田 清 (医師)

## キューバを愛する気持は同じでも「目的地」が真逆になった兄妹

ゲバラへのあこがれから始まり、キューバ革命、米国の経済封鎖を乗り切ってきたカストロのすごさ、現在のキューバの魅力や医療制度の素晴らしさ、これらを本から学んだ。

その中の一冊『花と革命』(竹内憲治 著 1977年/学苑社発行/絶版) は、革命の時代をキューバで生きた日本人の手記だ。この中にミス・ロシータという女性が出てくる。貧しい人を助けフィデルとも知り合いで革命を支援してきた女性が、革命後、裕福な階級ということで財産を没収され国を追われる話だ。

不思議なことではないのかもしれないが、キューバ関係の本は革命側から書かれた本が多いので新鮮だった。一般市民の視点、反革命側の視点も読まなければキューバ革命を本当には理解できないと感じた。しかし一般市民が革命前後について書いた本は非常に少ない。

革命後亡命したり反革命として戦ったりした人には、バチスタ政権に近い人、軍人、財産や土地を没収された人(革命支持の有無に関わらず)、革命を戦った側なのに革命後共産主義化に反対した人、など様々な人がいたようだ。彼らの書いた本はたくさんあるようだが、政治的な意図のある本も多いようで、しかも日本語に訳されている本は少ない。

フィデル、ラウルの妹であるファーナ・カストロの手記「カストロ家の真実」はCIAに協力しフロリダから反キューバ、反共産主義のメッセージを発信し続け、カストロ家と絶縁し、フロリダの亡命キューバ人からも攻撃され、最後はCIAからも裏切られた女性の一生をかけたメッセージである。

カストロ姓ゆえに身の危険を感じながらも革命を応援し、革命成功を共に喜びながら、共産化する政策や反革命者の処刑に抵抗し、“カストロ”の名前を最大限に利用しながら、処刑される人間数百名を助け亡命させていった。当時20代後半であるが、この姿勢を一生貫く。



ファーナ・カストロ 著  
伊高浩昭 訳  
中央公論新社 2012年  
本体3300円 (税別)

ファーナにいくつかの疑問を感じた。この本には革命前の市民の悲惨さというフィデルやチェの革命の動機につながるものが全く書かれていない。また米国の経済封鎖をいかに生きぬくかという視点もまったくくない。ファーナの基盤であるカストロ家は豊かな地主で、母も兄姉もファーナも革命で財産を失っている。知人や友人も、財産を没収され、亡命したり反革命の戦いをしたりしている階級であった。

ファーナは民主主義的革命を期待して支持してきた革命に裏切られたという思いで、フィデルを、政府を、共産主義を攻撃していく。しかし31歳で亡命し45年経って書かれたこの本は、父母、兄弟姉妹の写真をたくさん載せているし、一人一人の記述も好意的である。

キューバには責任を感じ、家族へは愛と誇りを求める気持ちを強く感じる。一人一人の家族についての詳細な記録は家族でなければ書けないもので、特にラウルについての記載は、他の本ではほとんど見られないので貴重だと思われる。

ファーナは、ラウルもチェも共産主義者だが、フィデルは違うといっている。革命が成功すると直ちに共産主義に舵をきったことを、国民に対する裏切りだと断定している。この点について私は、キューバ革命は反独裁、反帝国主義のホセ・マルティの思想を軸にした革命であり、アメリカの経済封鎖を生きぬくためにソ連と結びついていったと勝手に解釈してきた。ファーナの記載を読み、この点は分らなくなった。

フィデルもファーナも、目的に向かって一直線に努力し、誰も恐れず、私欲が全くなく、周囲の人を巻き込んでいく行動力があるという点では同じ種類の人間だろう。原点が異なり、したがって目的地が真逆になったが、キューバを愛する気持ちも“祖国か死か”という姿勢も同じなのだろう。